

■ 肢体不自由・病弱の子どもたちへの実践事例

肢体不自由・病弱の子どもたちの可能性を伸ばすマルチメディアDAISY活用の試み IV 私たちがお話し届けます！ Eのお話し宅急便！

東京都立光明学園・光明学園そよ風分教室
辻直美・矢下容子・禿嘉人

はじめに

東京都立光明学園は、2017年4月1日に肢体不自由教育部門と病弱教育部門の2部門を併置する特別支援学校として開校しました。

母体校である旧光明特別支援学校は、日本で肢体不自由教育を初めて行った公立学校として肢体不自由教育85年の伝統を積み上げ、旧久留米特別支援学校は、都内における病弱教育の一大拠点として80年の伝統を積み上げてきました。

こうした歴史ある両校の教育的蓄積と伝統・文化を継承し、さらに発展させることが本学園に求められています。

両部門ともICT活用の教育実践に力を入れ取り組んでいるところです。その一環としてマルチメディアDAISY活用を行っています。

学校の目指す姿と学校目標

本校では、校訓を可能性の追求として「学園生一人一人は、自分の可能性を信じて努力する」ことと、「教職員

及び専門家等は総力を結集し、学園生一人一人の可能性を徹底的に追求する」ことを目指し、以下の学校目標を掲げて実践しています。

- 自らの夢の実現に向けて、確かな学力を身につける。
- 健康で心豊かに、安全に生活する力を身につける。
- 互いの人格を尊重し、豊かな人間関係を築く力を身につける。
- 自己の役割を担い、協力・協働して主体的に自立・社会参加する力を身につける。

目標に掲げられている「夢の実現」「確かな学力」「生活する力」「人間関係」「役割」「協力・協働」「主体的」「社会参加」は、マルチメディアDAISYの活用に深く関わるものであると考えます。

マルチメディアDAISY図書を活用することは、一人一人のニーズに応じた教育実践が求められるなか、基礎・基本の学習力・コミュニケーション力・情報収集力をつけることにつながると考えます。

肢体不自由のある子どもたちの現状と課題

ここでは、肢体不自由教育部門の中学部の実践を紹介いたします。

肢体不自由のある子どもたちにとって、障害特性から生活体験・社会体験が少ない状況にあると言われます。本を読むことで世界を拡げ、いろいろな事柄への興味・関心や学習への意欲などにつながると考えますが、上肢に麻痺などがあり、視覚にも配慮がいる多くの生徒はページをめくることが困難さを抱えたり、文字が小さいと読み取ることが困難さを感じたりする状況があります。

また、経験・体験不足から、自信がもちにくく、人と関わるのが苦手な子どもたちも多いのが現状です。

今年度の実践では、主体的に読書に親しみ、マルチメディアDAISY図書をアクティブに活用することにしました。子どもたちの可能性を引き出す取り組みに焦点をあてた実践を紹介します。

研究テーマ

「肢体不自由の子どもたちの可能性を伸ばすマルチメディアDAISYの試み IV」

研究の目的

肢体不自由のある生徒の可能性を最大限に引き出すためのマルチメディアDAISYの活用を行う。

●新しい学習指導要領のキーワードから、マルチメディアDAISYの活用を考え取り組む。

- ・何ができるようになるのか
- ・何を学ぶのか
- ・どのように学ぶのか

①何ができるようになるのか

- ・学んだ力を学校や家庭生活の中で活かすことができる(余暇活動への広がり)
- ・考える力や表現力を身につけることができる(学習意欲の向上)
- ・自分の役割を通して自信をもつことができる(自己肯定感の向上)

②何を学ぶのか

- ・本への興味・関心をもち、新たな知識を身につけ、学習への意欲を高める
- ・基礎・基本の学習(言葉の習得・読み書きへの興味・関心)
- ・コミュニケーション力を身につける

③どのように学ぶのか

主体的・対話的・深い学びの試み
アクティブ・ラーニングの視点から学習過程を改善する。

活用の概要

①対象：中学部の生徒

教育課程：自立活動を主とする教育課程
知的障害を併せ有する教育課程

②活用の場面

本の選択

- ・個別の課題(国数)の時間
- ・生活単元の時間

本の紹介

給食終了後の時間13時～13時30分

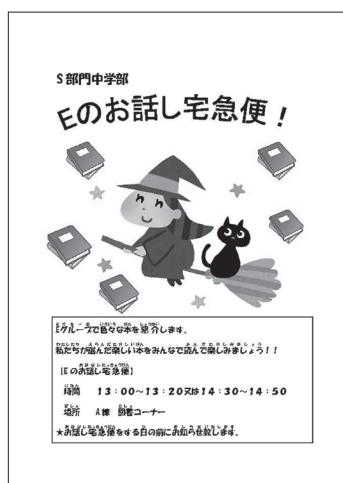
③活用 に際しての配慮

- ・主体的な取り組み…紹介する作品を生徒自身が選ぶ。役割を自分で選ぶ。
- ・視聴する生徒に実態や活用する場面や時間に応じて、作品を選ぶ。

活用の実際

『私たちがお話し届けます！』

Eのお話し宅急便！』



(1) 学校目標との関連

- 自らの夢の実現に向けて、確かな学力を身につける。
- 互いの人格を尊重し、豊かな人間関係を築く力を身につける。
- 自己の役割を担い、協力・協働して主体的に自立・社会参加する力を身につける。

(2) 活動内容

知的障害を併せ有する教育課程で学

ぶEグループの生徒11名が、マルチメディアDAISYを読み、その中から気に入った作品を中学部の生徒（おもに自立活動を主とする教育課程に学ぶ生徒対象）に紹介する活動を行う。



みんなが楽しめる作品選び
「大変だけど楽しい！」



それぞれ楽な姿勢で物語を楽しむ



週に一度のお楽しみ。今回も大勢が参加。

【活動の流れ】

- ①個別の課題の時間に、全員で「わいわい文庫」(iPad)を大型TVで視聴し、気に入った内容の話を2つ選ぶ。
- ②お話し宅急便の司会者を選ぶ。
- ③毎週水曜日の給食後13時から図書コーナーでお話し宅急便を開催する。
- ④始まりの時間のアナウンスをする
「♪Eのお話し宅急便始まり・始まり♪」
- ⑤司会担当がはじまりの挨拶と紹介する作品の題名を紹介
- ⑥作品を視聴する際の楽しいフレーズなどを連呼するなど盛り上げる工夫をする。
- ⑦司会担当が作品の感想を聞く。
- ⑧司会担当が参加してくれた人への感謝をしながら終わりの挨拶をする。

（３）子どもたちの本の選択

- ・子どもたち自身、お話しが長いと集中力が途切れる。また、約20分のなかで2冊の本を紹介することから、短い内容の本を選んでいる。
- ・楽しい内容や自分たちの生活に密接した内容や季節感を感じることができる内容を選んでいる。
- ・言葉の繰り返しやリズム感のある内容は、気に入って選ぶ。
- ・紙芝居風や役者さんの語りを選ぶことが多い。

・あいうえおにぎり
・おにぎりおむすび
・ぎゅ
・ことこと ことこと
・へんしんおばけ
・へんしんトンネル
・みんなうんち
・もっちゃう もっちゃう もうもっちゃう
……等

（４）子どもたちの変容

【本を紹介するEグループの生徒の変容】

- ・自分たちで主体的に本を選ぶ際は、視聴後に手を挙げてどの本がよかったか選択している。友だちの手を挙げる様子を見て取り組む子どももいる。どんな本を選ぶのか、互いに関心をもつ様子が見られる。
- ・本を紹介する役割を担うことで、自分たちが人の役に立つ仕事をしているという実感が得られ、役割を楽しむと同時に、やりがい感をもち、取り組む子どもの姿がある。司会は11人の子どもたちが担当することができ、言葉を発しない子どもも本の題名を書いた紙を見せるなどの役割を担うことができた。
- ・13時からの取り組みに向けて、時間を意識して給食を食べ、片づけができるようになった子どもがいる。自分の役割を意識することで、課題解決につながる場面も見られる。

- ・たくさんの子どもたちが見に来てくれることで、やりがい感や成就感を感じることができ、そのことで自信がもて、他の活動でも力を発揮することに期待できる。

【本を紹介してもらう自立活動を主とする課程に学ぶ子どもたちの姿容】

- ・給食後の30分の時間、身体を休めながら有効に活用することができる。
- ・気に入った本の紹介では、笑ったり声が出たり、その子どもなりの表現で楽しむ姿が見られる。
- ・大型TVの画面を注視する姿が見られる。
- ・集中して聞く姿が見られる。
- ・定期的に行うことで、その時間への期待感をもつ場面が見られる。
- ・仲間と一緒に活動する喜びを感じとる場面も見られる。

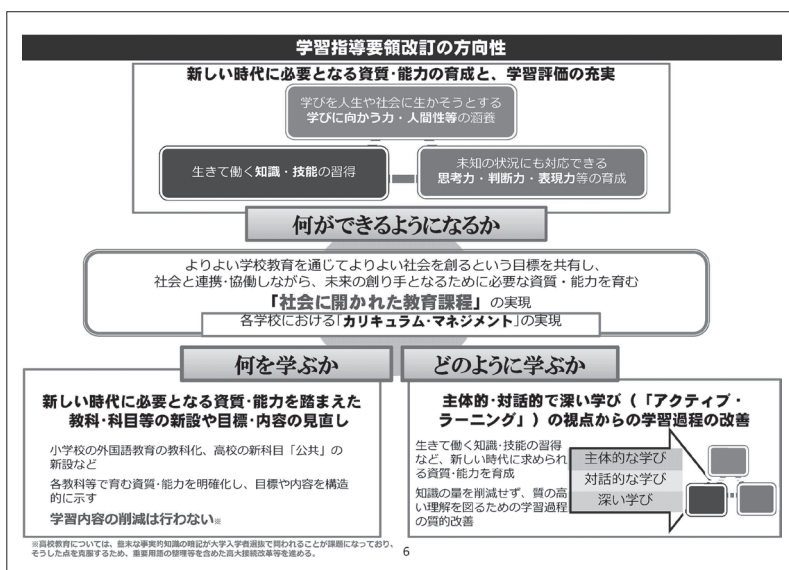
まとめ

今までの取り組みでは、何を目的に取り組むのかねらいを定めて実践してきた。

今年度は、さらに新しい学習指導要領のキーワードを読み解き、アクティブラーニングの視点を加味しながら新たな取り組みを行った。

子どもたちは、楽しんでお話し宅急便の活動に取り組んだ。学ぶことに興味・関心をもち、見通しをもち、取り組むことができたことや、自分の取り組みを振り返ることができたことは主体的な活動につながった。

また子ども同士で本を選び、役割を担いながら取り組んだことは、対話的な学びにつながった。さらに今回の活動は各教科での学びにも活かされ、自信をもって発言したり感想を述べたり



する力が育まれることに期待できることは深い学びにつながると考える。

障害の軽重に関わらず、どの子どもたちもみんな学びたいという気持ちをもっている。その気持ちにより添いながら実態に応じ創意工夫して授業を組み立てることで、子どもたちの可能性を追求していきたいと思う。

今後の課題は、どこでもだれでも取り組めるように、すべてのiPadやパソコンに「わいわい文庫」を入れていくことである。機器の環境整備をしていきたいところである。

病弱教育（病院訪問）での活用の実際

（１）病弱教育（病院訪問）での研究テーマ

病弱教育におけるキャリア発達の視点を踏まえた系統性のある授業づくり～自立と社会参加を実現するための教育システムの構築及び教育プログラムの開発～

（２）研究目的

病気治療のため、長期入院中の子どもがさまざまな本に触れるなかで、興味や関心の幅を広げていくこと。

（３）研究準備

最初は、該当する子どもが好きそうな本を教員が勧めて、「わいわい文庫」の使い方などを説明しました。休憩時間や体調が優れない時に、本人の読みたい本を自分で選んで活用しました。

（４）活用実態

対象：授業

場所：ベッドサイド

（東邦大学医療センター大森病院）

（５）様子や効果

対象の子どもは、「わいわい文庫」を、今回初めて活用しました。使い始めの頃は、幼児向けの絵本や昔話を見聞きしていました。特に『なぞなぞのみせ』や『ななみちゃんをつくろう』は、気に入ったのか、ページ数が多いからか、何度も自分で選んで見ていました。

国語の授業で音読を始めたときは、一文字ずつ読んでいたのですが、「わいわい文庫」の声に合わせて文節ごとに黄色いラインがつくところをととてもよく見ていたこともあってか、１学期の終わりには『おむすびころりん』が上手に読めるようになりました。

学習の積み重ねや知っていた物語ということも関係していると思いますが、マルチメディアDAISY図書の機能により、文節ごとに読むということがわかりやすく伝わったのではないかと思います。